



翡翠 -HISUI-

七瀬 佑衣
nanase yui



あの日の里久は

今もここにいる

もう、どれくらいの時間が経っただろう。

1年目の夏、蝉の声がやけに耳を貫いた。

汗は額にすら水滴をつけず、もうすぐ雨がやってくる頃だと意識した頃、里久（りく）のお父さんが額の汗を拭いながらこちらへ向かってるのが見えた。

お父さんがこちらに気付くと、軽く右手を上げた。

私は、おもむろに頭を下げた。

グラスに水滴がついている。

里久のお父さんが一口コーヒーをすすった。

外は雨が降っていた。

先ほどの晴天とは裏腹に、夕立のような強い雨を伴って、外ではアスファルトを叩きつけている。

「すごい雨だね。そういえば、里久は雨が割と好きだったよね。涼（りょう）ちゃんは知ってた？」

笑顔で私を見ながら、里久のお父さんはカップを手に持って話しかけてくる。

「知ってました。雨の日は、よく外眺めてた」

「まだ、苦しいね」

里久のお父さんは、そう言って少し悲しげな表情を浮かべた。

1年前の夏、最後に里久を見たのは、いつも変わらず送り迎えしてくれた私の自宅前だった。その日に限って、里久が1冊の本をくれた。

表紙が薄水色の、空の色にも似た、それでいて鮮明に映る、最初のページにはただ1行だけの文字が綴られた空の写真集だった。

「どうしたの、急に？キレイな写真」

「有名な写真家の本なんだけどさ、その1行の文字がなんだかとても気に入っちゃって」最初のページをめくると、そこにはたった1行、殴り書きのような文字が綴られていた。

『いた場所、ただキミのために』

どこか、心の奥にすっと入ってきた何かと似ていた。

里久が、一言呟く。

「オレの場所が、涼の場所なのかな」

私はクスッと笑って、里久の言葉に続いた。

「じゃあ、あたしの場所が、里久の場所なんだね」

二人の未来はきっと二人のためにつながっていて、そこに二人の未来があるから今も同じ場所にいる。

お互いの愛を確かめ合うとか、二人の間での不協和音なんて、そこにいればすべてがなくなるような気がした。

里久は、いつも未来を気にした。

「1年後も、また笑っていられたらいいね」

その言葉が、今も私の胸にずっと貫いて離れない。

その言葉の残酷さが、夏の鮮明な記憶と騒々しい夏の風景と共に、里久の時間を奪っていった。悔しさはどれだけの期間を苦しめただろう。

夏はきっと未来にはなく、そこにいた里久の記憶はもうつながることはない。

その残酷な毎日は、無情な季節の中で時間を伴わず、ただ里久だけを想った。

fact.4

アスファルトは、きっと冷たかった。

里久はどれだけ苦しかっただろう。

そこに里久の温もりはなく、そこから流れるものは里久の生きてきた日々の最後を、冷たい無情の流れの中で奪い去った。

里久を叫んだ。

動かなかったのは、ただ里久だけが流れたその空間だけだった。

里久の見た最後の記憶は、何だったんだろう。

そこに私がいたのなら、里久は苦しまずにそこにいられただろうか。

泣き叫んだのは、最後の里久との記憶だった。

里久の想いは、もうそこから感じることはなかった。

ただ、里久を想う苦しみが、里久を思い起こさせるすべての苦しみにつながるのなら、私はもう里久を想うことを望むことはないと思えた。

記憶は、なぜあるのだろう。

消してしまえば悲しみは消えるし、残してしまえば悲しみは苦しみを責めていく。

里久を想えない時間がこの先を苦しめていくのなら、もう記憶は里久を想うこともないだろう。

冷たい雨が降った頃、里久はただじっと空を眺めていた。

空を眺めて、その風景を知った。

その光景を眺める里久が、ただその記憶に残っていくのを感じた。

そこは、雨が降っていた。

その里久はただ笑っていて、そんな光景を見てホッとするのが大好きだった。

『涼と会う日は、必ず雨が降るね』

記憶の中では、里久の言葉が鮮明だと言い放ち、心の中では里久の笑顔が曖昧だと告げた。

いつもの場所では、そこにいる里久と私の空間は常に変化なく過ぎ、1年後の未来などただ笑うことでしかない幸せなつながりの空間でしかないと思えていた。

里久の場所には、私がいた。

私の場所には、確かに里久がいた。

冷たかった里久の顔を触った時の感触に、もしもその時の場所があったのなら、私はそこに里久を見なかった。

里久の場所にいたはずの私が、そこにいなかった。

いない空間で里久を見て、いた頃の空間で里久を見てはいなかった。

里久は今も、あの雨の日にいる。

『また、明日くるよ』

最後の夜、里久はいつもの笑顔でそう言った。

里久の最後はないはずだった。

里久との日々の連続は、常に二人の場所にあり続けた。

無常というものが世の中にあるのなら、私のいた空間は里久との日々を一瞬にしてしまった永遠だという記憶の中にある。

「雨、止んだみたいだね」

里久のお父さんがカップをテーブルに置くと、じっと窓の外を眺めながらそう呟いた。
記憶は、今を意識する。

『涼、雨止んだよ』

笑顔で身支度をしながら、里久はアイスコーヒーを一口飲んだ。

『もうすぐ、夏も終わるね。思い出がひとつ生まれたね』

里久の言葉には決して終わる要素もなく、その時の感情だけではつながらない何かがあった。
だけど、思い出があるとすると、里久との今を感じてこれたその瞬間が永遠のものであると感じることができた時間が、里久を永遠に想うことのできるその空間だったんだろう。
外の煌めきは雨につながり、止んだ後の匂いに似ていて、見るものは夏を思わせず、蝉はその終わりを無償の愛と告げた。

そこには、確かに里久は存在した。

あの夏の日を今につなげることができれば、私は今も里久を感じることができたんだろうか。

里久は今も、私の場所にいる。

いなかったのは、あの冷たかったその時の里久だけ。

里久は、私を感じることができているのだろうか。

里久と歩いた道。

里久と行ったお店。

里久と話した時間。

里久を感じた日々。

里久は、今も覚えているだろうか。

雨が、里久を幸せにしたんだよね。

笑顔は、透明に輝く雨の中にあったんだよね。

『明日は晴れるかな』

蝉の鳴き声が騒々しかった。

その中には、里久と私の記憶がある。

その流れが共鳴し合う何かに似ていて、里久のいた空間は私の記憶につながっていた。

確かなものなんて、見えてこなかったかもしれない。

本当の想いは、里久との時間を止めることでそこに二人の空間を留めることができた。

永遠があったなら、あの日の私は里久を求めただろう。

時間が里久を止めたから、私は終わりを知った。

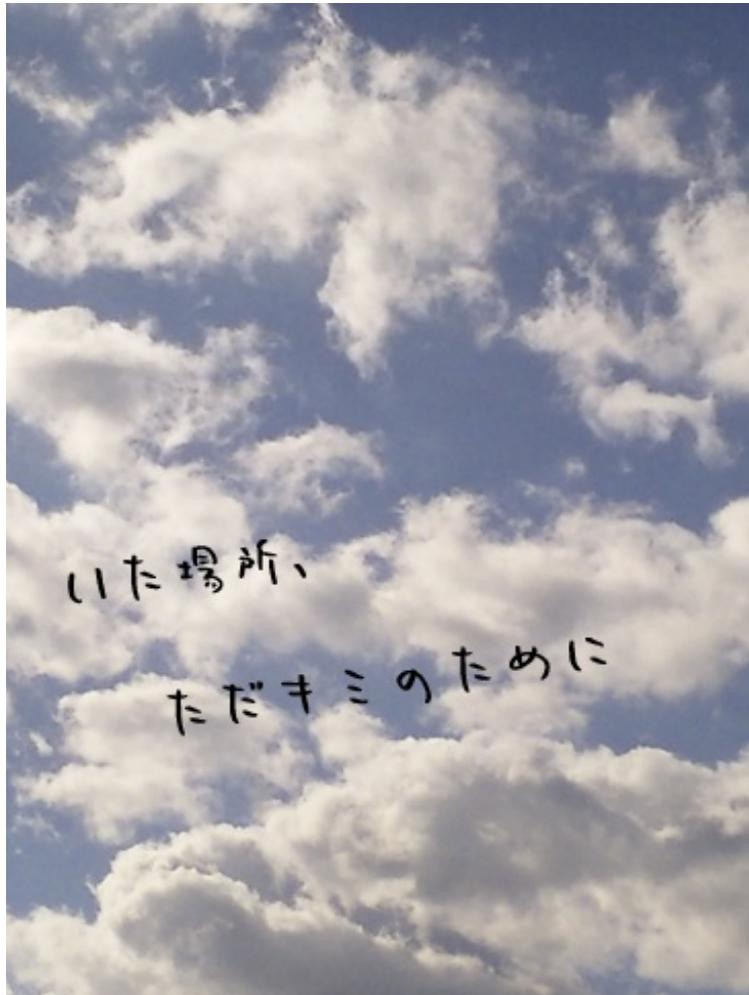
本当は苦しみなんていらないと言った。

だけど、人を亡くした痛みは、戻らない時間の意味を知ることができるのかもしれない。

「今日はありがとうね、涼ちゃん」
里久のお父さんが、少し笑いながらそう言った。
照りつける太陽が、雨に濡れたアスファルトを焼きつけている。
汗はすぐに滲んだ。
いろんな音と色、流れる景色。
里久と見た1年前の風景と、何も変わりはないように感じた。
ただ、里久がいないだけ。
日々は、里久を残して世界だけを回し続けた。
そこに里久はいなかった。
だけど、そこに里久は存在したよね。
いろんな想いを抱いて生き続けた里久は、ずっとこの世界で生きていて、ずっと笑顔で存在するんだよね。
ここに来たら、里久はいる。
雨が降れば、里久を感じる。
里久を想えば、あの日は続く。
今、苦しみがあるとしたら、1年前を忘れる苦しみとしてそこにあるのだろう。
癒える傷をなくしたら、痛みはすぐに想いをつなげることができるのだろうか。
里久が愛したすべてのものを、私はすべてとして痛みに変えてしまった。
だけど、そのすべてがやがて癒える傷になるのなら、里久との日々を未来につなげることができるのかもしれない。

『オレは今、生きてるよね。だけど、ホントにオレがいなくなったら、その後のオレが生きたはずの時間は、どうなっちゃうんだろう。そこに涼がいたとしたら、オレは涼を悲しませることになるのかな。涼を悲しませたら、オレはきっとそこに生きていくことを想うよ。いつも、涼と生きていくよ』

夕立ちは激しくて、優しくったあの日の想いに似ていた――。



私たちのいた場所は

永遠の雨が降る

E N D

作品に関すること。

翡翠 —HISUI— / 七瀬 佑衣 —nanase yui—

思ったこと。

感じたこと。

記憶に残ったこと。

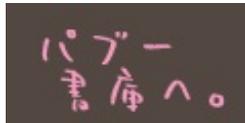
あなたの、温かい言葉で
感想を聞かせてください。

↓♪*・∨・*♪↓



本棚に入れたい方は、
こちらから。

↓♥*・3・*♥↓



電子書籍プラットフォーム：[ブクロブのパプー](#)

運営会社：株式会社paperboy&co.